

# 「9回転んでも10回起きてみせる」 浅野 総一郎

さまざまな事業に挑んだ実業家

「日本のセメント王」と呼ばれた

京浜工業地帯の生みの親



1848 (嘉永元) 年4月13日—1930 (昭和5) 年11月9日

## 大商人を夢見た医者の子

総一郎は医者の子に生まれましたが、医学の道には進まず、将来は大商人になることを夢見ていました。15歳のときからいくつもの仕事をやってみましたが、どれも

失敗し、多くの借金を抱えてしまっています。このため、23歳になった1871 (明治4) 年、借金の取り立てから逃げるようにして東京へ出ました。



永見市数田にあった生家 (『浅野総一郎』より)

## 商人として成功したい

商人として成功したいという熱い思いをもっていた総一郎は東京ではまず、砂糖水売り歩き、次に食料品を包む竹の皮を売りました。商売はうまくいき、店を構えて従業員を雇うまでになりました。

知り合いから、「薪や炭などの燃料を売るともうかる」と聞いた総一郎は、薪や炭の商いに精を出しました。安い薪や炭を大量に仕入れ、他の業者よりも安く売った結果、貿易商人や役所に炭を買っ

てもらえるほどの信用を得るまでになりました。

そのうち、燃料にはガスが使われるようになりました。ガスを作るときに出るコークス\*やタールなどの処理にガス会社が困っていることを知った総一郎は、これらを有効に利用する方法を研究しました。そして、国が経営する深川セメント製造所に、コークスでセメントを焼く方法を提案し受け入れられました。



青年時代の総一郎 (太平洋セメント提供)

## 赤字のセメント会社を立て直し

その後、官営の深川セメント製造所では赤字が続く、民間に払い下げられることになりました。「セメント工業は将来発展する」と信じていた総一郎は、払い下げを受けたいと申し込み、最初は国から借りることになりました。総一郎は工場名を「浅野セメント工場」に変え、自分も従業員と一緒に働きました。

1884 (明治17) 年に工場は総一郎に払い下げられ、1898 (明治31) 年に「浅野セメント合資会社」となりました。このときに10万円を出資したのが、同じ富山県出身で、安田銀行を創設した安田善次郎 (→28ページ) でした。安田は総一郎を高く評価し、その後も総一郎の事業を支援していきました。



総一郎に払い下げられた官営深川セメント製造所の工場 (太平洋セメント提供)

\*コークス【こーくす】 石炭を乾留(蒸し焼き)した燃料のこと。燃やしたときの発熱量が高いことから、鉄を作るときに欠かせない燃料となっています。

## 故郷のための二つの公益事業

1896 (明治29) 年にヨーロッパを視察した総一郎は、日本の港の貧弱さを痛感しました。総一郎は、港と工場が一体となった臨海工業地帯を造れないかと考え始めました。

総一郎は神奈川県鶴見沖の遠浅の海岸を埋め立てて、規模の大きな工業地帯を造る計画を立てました。資金は安田善次郎 (→28ページ) らが援助し、約14年を費やして京浜工業地帯の基となる埋め立て地が完成しました。

このころ総一郎は「故郷へ贈る二大公益事業」の構想を発表しています。その一つが「高伏運河建設構想」です。高岡駅と伏木間に運河を掘り、放生津瀉を埋め立てた工場用地と結んでこの地域を日本海側最大の工業地帯にしようとするものです。

もう一つの「庄川水力発電構想」は、庄川にダム式発電所を建設し、その電力を太平洋側の工業地帯へ送ろうという大事業です。

「高伏運河建設構想」は、現在の伏木富山港の臨海工業地帯へとつながっていきました。「庄川水力発電構想」については、総一郎は小牧ダムの建設に取りかかりました。その後、事業は日本電力(現関西電力)に引き継がれていきました。



湛水直前の小牧ダム



庄川水記念公園に建てられた総一郎の銅像



京浜工業地帯 (国土交通省関東地方整備局京浜港湾事務所提供)

## 夢や志をかなえたポイント

- 何度失敗してもくじけない
- 力になってくれる理解者をもつ
- 社会の役に立つ仕事を見つける

豆知識 「七転び八起き」とは、失敗のたびに立ち直ることです。失敗が多くても、立ち上がった総一郎は「九転び十起きの男」ともいわれています。

1848 (嘉永元)	0歳
水見郡数田村に生まれる	
1871 (明治4)	23歳
事業に失敗し上京する	
1872 (明治5)	24歳
鈴木サクと結婚	
1873 (明治6)	25歳
横浜で新炭商売を始める	
1878 (明治11)	30歳
横浜に日本初の公衆便所を設置	
1881 (明治14)	33歳
「浅野セメント工場」を発足させる	
1898 (明治31)	50歳
浅野セメント合資会社設立	
1913 (大正2)	65歳
東京湾埋め立て工事に着手	
1919 (大正8)	71歳
庄川水力電気設立	
1930 (昭和5)	82歳
欧米視察中に発病し帰国後亡くなる	

## コラム 浅野の事業を 陰で支えた妻サク



総一郎の妻サク (『浅野総一郎』より)

総一郎は東京で竹の皮を売る仕事をしていたころ、布団が買えず店の向かいの呉服屋から借りていました。その店で働いていたサクという女性に恋して、結婚しました。

サクはよく働き、総一郎を助けていました。総一郎の会社の一つである関東水力電気が建設を請け負った群馬県の「佐久発電所」の名前はサクの名前にちなんだものです。